ラテンアメリカにおける プロテスタント右派の台頭

乗 浩子

一 はじめに

最初、主催者の方から「解放の神学」について報告するようご指示頂きました。確かに解放の神学は興味深いテーマですが、現在ラテンアメリカでは解放の神学の影は薄くなっている、右派のプロテスタントの影響が強くなっておりますので、今日はこのテーマでお話をさせていただきます。

私はラテンアメリカの歴史や政治に関心を持っておりませんが、宗教を抜きにしては理解しにくい地域では

ないかと思えます。ただし私自身特定の宗教を信仰しているわけではありません。宗教に関してはアンチでもプロでもない平均的日本人の一人の報告としてお聞きいただければ幸いです。

宗教は、人と思想とを主な資源にして、歴史的にグローバルに展開してきたのですが、中東で生まれたキリスト教がまずヨーロッパの宗教になり、今や発展途上国の方に比重が移ってきているという状況です。カトリックの牙城といわれてきたラテンアメリカで最近目立っているのは、宗教にも市場原理が働いて、自由

に好きな宗教を選択するという状況が生まれておりまして、カトリックの独占体制が揺らぎつつあります。プロテスタントやアフリカ・ディアスポラ宗教（ウンバンダとかカンドンブレ）や先住民の宗教も活況を呈していますし、日本の宗教が非日系人などにも浸透しています。また個人が複数の教会に足を運ぶというように、宗教の多様化が進んでおります。

二 プロテスタントの到来

一五世紀末にイベリア半島のスペイン・ポルトガルによって征服されて以来、ラテンアメリカではカトリックでない者は異端審問で排除されました。ユダヤ教・イスラム教・プロテスタントは禁止され、先住民は強制的にカトリックに改宗させられました。ラテンアメリカにプロテスタントが到着したのは、一八一〇—二〇年代にこの地域が独立を遂げた後のことで、本格化するの是一九世紀後半からです。

欧米からおよそ三つの布教の波が押し寄せます。第一の波がメソジスト・長老派・バプティストなどヨ

ロッパの古典的なプロテスタントのグループで、このグループはラテンアメリカの近代化や民主化にかなりの貢献をしております。次に訪れた波は「北方の巨人」とラテンアメリカの人たちが称している米国から、福音派の勢力が一九世紀後半—二〇世紀の初頭にかけて熱心に宣教活動を行います。ちなみにこの福音派というのはアメリカではプロテスタントの一派ですけれども、ラテンアメリカでは非カトリックのキリスト教諸派（主にプロテスタント）を福音派（エバンヘリコ）と総称しております。第三の波として二〇世紀初頭に、アメリカからペンテコステ派が輸出され、これが現在ラテンアメリカだけではなくアフリカにも大変な勢いで広がっているわけです。参考文献②の表題に示されているように、アフリカとラテンアメリカで、キリスト教の新しい現象になっております。

アメリカでは福音派の一部とペンテコステ派に原理主義、いわゆるファンダメンタリズムの傾向が見られ、聖書の文言をそのまま信じて近代科学や世俗化に反対しております。一九二〇年代のファンダメンタリスト

は進化論に反対することに熱心だったようですが、一九八〇年代のレーガン政権の頃に再興したファンタメソロジーは政治化し、レーガン政権の外交政策を支持してラテンアメリカの政治に介入しました。

特にプロテスタントが拡がっている地域はアメリカに近いところで、中米、ブラジル、チリなどが盛んです。ラテンアメリカ全体としてみますと、一九〇〇年頃に九〇万人程度であったプロテスタントが、二〇〇〇年には四、八〇〇万人、つまり五、〇〇〇万人近くになっていきます。人口増を考慮しても非常な勢いで増えており、いま人口の一割ぐらいがプロテスタントです。一割では大したことはないと思われかもしれませんが、カトリックは名目的な信者が多いので、アクティブに熱心に教会に通っているという意味で、プロテスタントはカトリック以上に社会的な影響を与えております。そのプロテスタントの約半分がブラジル人です。ブラジルでは現在、総人口の一五％位がプロテスタントであると見られております。

ペンテコステが非常に増えてきたものですから、最

初に到来した伝統的なメソジストなどの古典的なグループは少数派になっており、ペンテコステ派がプロテスタントの六割から七割ぐらいを占める状況になっております。支持層としては、貧しい人たちの中に、特に女性に浸透しております。これにはマチスモというラテンアメリカの伝統が関係しているようです。マツチョというのは動物のオスを意味する言葉で、男性がオスらしく振る舞い、女性にたくさん子供を産ませて、それを放ぼってまた別の女性のところへ行ってしまうという身勝手な行動に寛容な空気が、下層の人たちの中にまだ根強く残っております。置き去りにされた女性には子供を抱えて生きていくのが大変で、ペンテコステ教会に慰めを求めるといふわけです。

アメリカは一九世紀末からラテンアメリカに対する布教活動に積極的になったと申し上げましたが、その背景には遅れた地域を文明化し近代化するのにはアメリカ人の神から与えられた役割であるという使命感があったようです。アメリカから見ますと、ラテンアメリカは教皇を頂点とする権威主義的なカトリック教会が

支配的であるために、民主化や近代化が遅れている。そこでカトリック勢力の弱体化を図ってプロテスタントを広めていくことに大きな意義があるとして、積極的に布教を進めました。

一九六〇年代になると、キューバ革命後のラテンアメリカが社会主義化したら大変と考えたアメリカ政府は、その阻止をラテンアメリカ政策の中心に掲げます。その頃からラテンアメリカで盛んになった解放の神学は、反米・反資本主義的なものとみなされ、その勢力拡大を阻むために、政府の政策の一環として布教団の支援が図られます。さらに一九七九年にニカラグアで革命が起こりますと、レーガン政権は反革命派を支持するために中米への布教団派遣を援助します。

このような布教活動の中心となったアメリカのプロテスタント右派は、現在のブッシュ政権の背後にあるいわゆるネオコンを支持するキリスト教組織とつながりを持っているのではないかと思います。こうした布教団の人々は、一九七三年にチリで軍事クーデターによってアジェンデ社会主義政権を倒したピノチエトを

救世主と讃えました。悪魔、すなわち社会主義をチリから追い出したと評価したのです。アメリカではテレビ説教師と称されるバット・ロバートソンやジミー・スワガートなどが、自分のテレビ局の画面を通じて、ラテンアメリカの左派勢力をたたき、右派を持ち上げるといふ政策を盛んに放送しました。

当時アメリカの福音派やペンテコステ派は中米を中心に積極的に布教を進めました。教会を建て、食料品や衣類やスペイン語の聖書などを送り込みました。ラテンアメリカの貧しい人々にとっては、プロテスタントの教会に行くとお昼を振る舞われ、薬や衣類がもらえることが、改宗へのインセンティブになります。特にアメリカの影響のもとでプロテスタントが増えたのは中米のグアテマラです。

グアテマラでは人口の殆どを占める先住民の間で、コロンブス到来以来奪われた土地を取り戻して耕したいという土地改革の要求が六〇年代から高まりました。一部は農民ゲリラとして活動を展開し、それを政府軍や右派の軍事組織が武力で鎮圧するという内乱状態と

なります。一九八〇年代にリオス・モントという福音派の軍人がクーデターで大統領になると、徹底的に先住民の皆殺し作戦を展開します。先住民は殆どが農民ですから、土地改革というけしからぬことを要求しているとして、弾圧されました。それに対してカトリック教会が人権侵害であるときびしく批判したので、カトリック教会は目の敵にされました。そこで、村人はカトリック教徒が多かったので、皆殺しを恐れて、村ごとプロテスタントに改宗してしまうということも起きました。こうしてプロテスタントの勢力が根付くことになりました。

これまでプロテスタント教会のマイナス面を申し上げたのですけれども、プロテスタントの布教団は、例えば貧困地区に学校を建て、子供たちに就職の機会を与え、上昇志向を育てました。プロテスタントの教会に行くとお金持ちになれる、良い生活ができる、中産階級になれるのではないか、という夢を貧しい人々が抱くようになってくるわけです。

三 ペンテコステ派の伸張

いま活況を呈しているペンテコステ派は、聖書に基いて生まれた新しい運動です。使徒行伝によると、復活したイエスが弟子たちに対して「あなた方はまもなく（水ではなく）聖霊によって洗礼を受けるだろう」と告げ、この約束が五旬節（ペンテコステ）の日に果たされます。五旬節はユダヤ教で過越の祭りから五〇日目、キリスト教ではイエスの復活の日から五〇日目にあたり、聖霊降臨日ともいわれます。そのペンテコステの日に弟子たちは皆聖霊に満たされて、お互いに聞いても分からないような他国の言葉、異言で話し出したというのです。さらに弟子たちは、癒しとか予言の能力などの霊の賜物（カリスマ）を得たといわれています。マックス・ウェーバーが類型化した「カリスマ」的支配もここに起源があります。

この聖書の記述から、二〇世紀はじめに聖霊との交わりを重視するエモーションナルなペンテコステ派が誕生します。もともとキリスト教は悪魔や聖霊や奇跡に

満ちた、非常に神秘的な宗教でした。ところが教会が制度化されるにつれて、教義や儀式が信仰の中心になります。知識人たちがそうした合理化を図っていくわけですけれども、農民や労働者の中にはこうした行き方に違和感を覚えて、むしろ聖書に書いてあるとおり神秘的なものを求めるといふ動きが出てきます。それが一九〇六年に近代プロテスタントイズムの中心であるアメリカの西海岸で、黒人リバイバルの一環としてペンテコステ運動という形で出現し、これが発展途上地域に急速に拡大したのです。例えばブラジルでは、四年後の一九一〇年からペンテコステ運動が根付きはじめます。

では何故この新しいキリスト教の運動が拡大したのか、その背景を考えて見ますと、工業化とか都市化という社会変動によって伝統的な絆が絶たれて、拠り所を求める人たちが増えてきた事情があるようです。ラテンアメリカはもともと日本とは全く対照的な社会構造を特徴とする所です。日本はおそらく世界で一番所得が平準化している国ではないかと思いますが、それ

でも最近格差が問題になってきました。ラテンアメリカの場合、コロンブス到着以降、良い土地は白人が奪ってしまふという格差社会が構造化されていて、土地改革は容易に実施されません。一九世紀後半から経済リベラリズムが定着し、ラテンアメリカは先進国への原料と食料の供給地として位置づけられました。一次産品価格が暴落した世界恐慌のち、一九三〇年代以降、先進国から輸入する代わりに工業化するという輸入代替工業化が国家の保護のもとに始まります。

それが行き詰まってきたのが一九六〇年代、七〇年代で、試行錯誤の「失われた一〇年」（八〇年代）を過ぎた後、自由化・民営化の時代に至るわけですが、その速度と徹底したやり方は、東アジアの国々と比較しても驚くほどです。例えば年金や水道なども民営化してしまふ。民営化すると外資が参入してきて、良いところは持っていかれてしまふ。気が付くと将来の保障がなくなっていたり、水道料金が払えない水も出ないような生活に陥ってしまふ。今ラテンアメリカでは選挙のたびに左翼的で反米的な政権が誕生して

おりまして、例えばベネズエラのように資源を国有化する方向にあるのも、行き過ぎた自由化・民営化に対する反動ではないかと思えます。日本などと比べても、経済政策の極端から極端へという振幅が激しいので、合理化で大勢の失業者が出る、中産階級の下の方の人たちは貧困層に落ちてしまい、これまで以上に貧困層が増える、そういう人たちが、すぎるものを求めてペンテコステに行くという状態です。

ペンテコステは、もともとアメリカからやってきた人たちがアメリカの資本に助けられて教会を建てて始めたグループですけれども、次第に何もアメリカ人の助けはいらぬ、自分たちでやるという土着化の動きが強くなっております。これは六〇年代、七〇年代頃からでしょう。その良い例として、いま注目されているのがブラジルの「神の王国ユニバーサル教会」(IURD)です。一九七七年にエディル・マセドがリオデジャネイロに教会を建てたことから始まります。彼は下層中産階級出身で、宝くじ売り場で働きながら大学で数学などを勉強したという人なのですが、リオを経

てサンパウロに進出し、ブラジル国内はおろか先進国にまで、たとえば日本にまでいくつも教会を設立しております。

四 ペンテコステ派の論理と行動

ペンテコステ派は、もともと教義よりも神と直接に自分が交流することを尊重しますが、あえて教義といえるものを探つてみたいと思えます。アフリカのペンテコステを研究しているポール・ギフォードは、その教義の特徴として、繁栄の神学、悪魔からの解放、キリスト教シオニズムの三点をあげています(参考文献②を参照)。ペンテコステ派の教義や布教の方法などは、いずれも北米が起源ですが、地域を越えて共通したものがありますので、ラテンアメリカの場合もおそらくかなり通用するのではないかと思えます。

まず繁栄の神学なのですが、アメリカで一九五〇—六〇年代に流行った「健康と富の福音」という名称で知られた神学です。教会に惜しみなく献金をすれば、神様はそれに利子を付けて返して下さる、つまり富と

健康に恵まれるから、大いに献金しなさいと呼びかけるわけです。ペンテコステの場合、収入の十分の一を教会に出すという、十分の一税のようなものですが、もともと非常に貧しい人たちですから、それだけを寄付するのはかなり大変です。例えば先に挙げたブラジルのユニバーサル教会などは、あまりに強引に取り立てたとか、詐欺を行ったとか絶えず裁判沙汰を起こしていて、大変毀誉褒貶の激しい教団なのです。どんどん巻き上げられても、神様もつと豊かにして下さるから、貧困を克服できるのだと、かなりの信者は考えているようです。

伝統的なプロテスタントの中に見られる世俗内的禁欲の傾向は、ペンテコステ派の中でも初期の段階ではあったようです。しかし、例えばユニバーサル教会に代表されるような七〇年代以降のネオペンテコステでは、女性が美しく着飾ったりハイヒールを履いたりして大いにきれいになった方が、神様は喜んで下さるのだと考えます。苦しむのはやめよう、というのがユニバーサル教会のスローガンです。欲望や快楽を求めて

いくことが繁栄をもたらすのだというわけです。

二番目の悪魔からの解放は悪魔払いということですが、けれども、その悪魔とは具体的には貧困、病氣、暴力、麻薬など貧しい人たちを苦しめているもので、こうした災いから悪魔払いによって解放される。ただ、例えばアフリカ系の宗教に現れる憑依霊とか、パレスチナでユダヤ人に敵対するイスラムなども、この悪魔に数えられる場合があるようです。

それに関連して、あまり聞いたことのないキリスト教シオニズムが、教義の三つ目に掲げられているのではないかと思えます。カトリックと違い、プロテスタントの場合はユダヤ・キリスト教的な伝統を尊重しますから、そういうところから親ユダヤ的キリスト教というふうに考えて良いのではないかと思えます。プロテスタント右派によりますと、神は地上では二人の代理人を通じてさまざまな働きをする。第一の代理人は教会であって、第二はイスラエルである。従ってイスラエルは防衛されねばならないというのが、このキリスト教シオニズムの立場です。

このペンテコステ派がアフリカでも拡がっているというのを先に申し上げましたけれども、ペンテコステ派はアフリカの独裁体制を安定させることでは貢献しておりますが、アフリカではイスラム教徒が人口の約四〇%を占めていますので、宗教紛争をあちこちで引き起こしているようです。ですからペンテコステ派は体制の安定要因であり、また不安定要因にもなるという相反する役割を果たすことになるようです。

一方ラテンアメリカの場合は、パレスチナ人などが少しずつ増えてきておりますが、イスラム教徒は人口の〇・三%程度で、キリスト教社会への同化志向が強いので、宗教紛争が起こる可能性は少ないようです。むしろ圧倒的なカトリック支配に対して挑戦を試みているという意味では、むしろプロテスタントは保守的な近代化・民主化勢力とみて良いのではないかと思われれます。

ペンテコステ派が拡大していると申し上げましたけれども、例えば町なかの映画館とかスーパーマーケットなどがちよつと落ち目になってきますと、教会がそ

れを買い取ってリニューアルして大会堂にするわけですね。大会堂でテレビやラジオを駆使して、いかに癒しを行っているかを人々に伝えます。大会堂を造って、そこに来た人たちに安心感を与える、座り心地の良い椅子を備えることも全て癒しにつながるというので、一日に三回大会堂で礼拝を繰り返す。アメリカのプロテスタント右派が大会堂でテレビなどを駆使して派手に礼拝を行うその方式が取り入れられているようです。大会堂で、自分はいかに夫の浮気で苦しんでいるか、でもこの教会に来たおかげでこういう安らかさを得たと聴衆の前で話すわけです。会堂で聞いている人たちがテレビで見ている人たちも自分の経験と重ね合わせて共感し、改めて会場に足を運ぶことになりました。教会は二十四時間開いていて、牧師や助手が詰めており、いつ相談に来ても応じられるようになっているので、教会が自分たちのものという感じがあるようです。

八〇年代にラテンアメリカ諸国が軍政から民政に移行した頃から、ペンテコステ派は政治的にも進出し始めます。例えば他のプロテスタントと協力して福音教

治同盟というような組織を作ったり、党派を超えて協力する傾向が見られます。その主張の第一は政治の浄化で、不正選挙や汚職をなくして、政治を清潔かつ道義的なものにしていこうというものです。妊娠中絶や離婚法を認めないなど、アメリカでも大きな争点になるようですけれども、こうした家族的な価値を守ることが主張の第二点。

主張の三番目は、カトリック教会に認められている特権の廃止です。ラテンアメリカでは憲法でカトリック教会の権利を位置づけている国が多いですし、カトリック教徒でなければ大統領になれないと謳っている国もあります。プロテスタントの人たちが一番問題にしているのは、自分たちが納めた税金がカトリックの教会や学校の維持に使われていることです。これは本当の意味での政教分離ではない、真の政教分離を実現すべきではないかという主張です。

盛んに活動しているペンテコステ派の例として、先ほどブラジルの神の王国ユニバーサル教会を挙げましたが、このユニバーサル教会は、一九八〇年代から国

境を越えて支部教会を設立する活動を展開しております。まず隣のパラグアイ、アルゼンチンというラテンアメリカ地域、それから同じポルトガル文化圏のポルトガル、アフリカのアンゴラ、モザンビーク、ついでイギリス。地域としてはヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカが中心で、キリスト教がかなり発展しているフィリピンやロシアなどが主なところ です。

特に力を入れているのは、ブラジルの出稼ぎ労働者が多数働いているところに教会を建てることです。ロンドンでも大きな劇場を買収して教会に改造しております。出稼ぎ労働者は先進国の周縁部で劣悪な条件で働いているわけですから、祖国とのアイデンティティを強めることで励ましていこうという意図で、先進国にも拠点を築いていくわけです。もちろんアメリカで働くヒスパニックも標的の一つで、幾つかの教会を造っております。アメリカでは最初礼拝を英語でやっていたのですけれども、人が集まらないのでスペイン語に変えてから教会は盛んになったようです。現在世界の九五カ国に二二〇位の教会を造っております。

日本では日系ブラジル人が多い浜松や大泉（群馬県）など十五箇所ユニバーサル教会がありますが、最近では日系ブラジル人だけではなくて、日本人を対象にして布教活動をしようということから、二〇〇四年に池袋に支部教会ができました。カウンセリングを看板に掲げているので、一般の日本人には教会と判断し難い感じですし、布教が成功するか疑問です。小さな会堂ではブラジル人牧師の繰返しが多い説教と大音響の奏楽に耳がおかしくなりました。隣に座った日本人の青年から、自分はバーテンで、いろんな教会へ行ったけれどここが一番良いから、あなたも続けて来て下さいねとしきりに誘われました。また助手のブラジル女性から誘いの電話が再三あって、お断りするのが申し訳なかったのですけれども、一回しか行っておりません。

これまで先進国から途上国に人やお金を送って布教活動が行われていたのですが、南の方から先進国にまで布教活動を展開していくという、人と資金の流れを逆転させるトランスナショナルな動きが出てきたとい

うことから、ユニバーサル教会は注目されておりません。

五 カトリック教会の対応

このようなプロテスタントの活況にカトリック教会はどう対応しているのでしょうか。カトリック教会の公式の立場はエキュメニズム（教会再一致）です。本来キリスト教会は一つであったので、分かれてしまったギリシア正教やプロテスタントと再び一緒になり、さらには全世界的な神学をめざそうというものです。この方針がはっきり打ち出されたのは、一九六〇年代に教皇ヨハネ二三世のもとで開かれた第二バチカン公会議においてでした。

しかしこれはあくまでも公の立場であって、進歩派はこういう理念に共感しておりますが、教会全体としてはエキュメニズムという広い立場には立ちにくいようです。例えばこの間亡くなったヨハネ・パウロ二世は、「プロテスタントはカトリック教徒という羊の群れを襲う強欲な狼であるから、注意しなければいけない」

などと公の場所で説教しておりますから、何世紀にもわたって互いを悪魔とののしりあつてきた関係を修復することは、なかなか難しいのではないかと思われま

す。

特にカトリックの場合には、長い伝統の中で安住してきたということもありまして、いろいろな問題がございます。まず挙げられるのは圧倒的な聖職者不足です。かつてはスタンダールの『赤と黒』ではありませんが、息子の一人を聖職者にして、一人を軍人にするという方式が伝統的な家族でみられましたが、聖職者はいま余り魅力がありません。結婚もできませんし、昔ほどの権力も無い。数が不足しているものですから、外国から聖職者を招く。国によっては、半数がアメリカ人であったりヨーロッパ人であったりということ、一般の信者にはあまり親近感が持てないという場合が多いのです。

それに対してプロテスタントの場合は、簡単に牧師になる事ができるので、人数に不足しません。メソジストや長老派など古典的な宗派はきちっとした教育を

長い間受けてから牧師になりますので、かなりの信頼を得ていましたが、ペンテコステの場合は、教会に行つて聖霊を雨のように受け、神と直接に話し合う、そうするともう自分は教会を建ててよいのだということ、で簡単に建ててしまいます。カトリックの場合は教区がはっきり決まっておりますから、容易に新しい教会を建てるわけにはいきませんが、プロテスタントの場合はこちらが良いからこの家を教会にしようという感じで、左前らしいスーパーを買収して教会にするという調子で、大変な勢いで教会が増えていきます。

一九九〇年代頃までは、この調子でプロテスタントが増えていくと、ラテンアメリカの人々の大半がプロテスタントになってしまうのではないかと考えられました。ラテンアメリカはプロテスタントになるのでは？（参考文献①を参照）という雰囲気、例えば二〇一〇年頃にはブラジルの人口の五七％はプロテスタントになる、グアテマラは一二六％がプロテスタントになる、というような予測もされておりましたけれども、九〇年代以後、それほどテンポでは伸びていないの

です。

一つにはあまりにお粗末な牧師がいて、教会に行っても話が面白くないということもあるようです。またカトリックでは女性が聖職者になれないことも問題で、尼さんは大勢いても、実際に責任のある聖職はやらせてもらえないということなのです。プロテスタントの場合はカトリックのように禁じられてはおりませんが、それほど簡単ではないようです。女性が容易に聖職者になれるのは、アフリカ系のカンドンブレーやウンバングダの方なのです。これは貧しい女性が上昇するチャンスを与えられるということですから、非常に女性が活気づくわけです。

ところで、解放の神学が貧しい人たちをターゲットにして成功を取めたのではないかと、皆さまはお考えのことと思います。確かに解放の神学の中心に基礎共同体という貧しい人々で構成される草の根的な組織があるのですけれども、実はカトリックの基礎共同体とペンテコステ派が民衆宗教市場をめぐる信者の争奪戦を行ってきた観があり、どうも勝ち目はペンテコス

テの方にあるようなのです。

一つには、カトリックは聖書をあまり読まなかったのですが、解放の神学が聖書を重視したということではプロテスタントと似たところがありまして、基礎共同体も聖書購読が中心でした。ところが聖書を読める人、字を読める人が少ないのです。また基礎共同体では沢山の印刷された資料が配付される。そうすると、文字の読めない人たちは何となく居心地が良くないということになります。ところが、ペンテコステの教会はプロテスタントですけれども、実際にはあまり聖書は読まずに、神様と直接交流することが大事ですから、みんな踊ったり恍惚状態になる。文字など読めなくても、恥ずかしい思いをしないですみますから、ペンテコステの方に惹かれていく。

もう一つは、ペンテコステの教会では家庭内のさまざまな悩みを女性たちが打ち明けあい、励まし合うことで力を得られるのですが、基礎共同体では家庭内の悩みなど次元の低い話よりも、貧困や不正などの構造的暴力と戦い、社会構造を変革すべきだというような

次・元・の・高・い・話・し・か・で・き・な・い・わ・け・で・す。しかも、そうしたことにあまり関わり、社会紛争に巻き込まれるという身の危険もありまして、具体的に一番切実に悩んで、どうやって暮らしていこうかというようなことに答えてくれないわけです。そこでペンテコステ教会の扉をたたくということになります。

弱体化しているカトリック教会の中で今最も活気があるのが、カトリック・カリスマ刷新(CCR)という運動で、カトリック教会はこのカリスマ運動をカトリックの活性化に役立てようとしているようです。カトリック教会や最初にヨーロッパから来た古典的プロテスタントの歴史諸派のグループは、新しいペンテコステのようなグループをセクト、あるいはスペイン語ですとセクタと呼んでおります。そのセクトに反撃する組織として、このカリスマ運動が注目されているわけですが、これもアメリカで生まれたものなのです。一九六七年にアメリカのカトリック系の大学で学生と教授たちがペンテコステ派のグループと一緒に礼拝を行い、聖霊の洗礼を受けて異言を語り出したという経験

から、カリスマ運動は始まりました。ペンテコスタル・カトリシズムと自称していたように、非常にペンテコステに近い、本来はエキュメニカルな運動で、ラテンアメリカには一九七〇年代に到来しました。

それではペンテコステとこのカトリック・カリスマ刷新はどこが違うかといいますと、このカトリック・カリスマ運動は聖母マリア、ラテンアメリカではメキシコのグアダルーベの聖母が先住民との混血の聖母として有名ですけれども、その聖母マリアと教皇に対する忠誠心を失わずに持っているところとかが違うわけです。カトリック教会のなかでもいろいろな議論があつて、カリスマ運動を認めたらカトリック教会の信者たちがペンテコステの方にもついていかれてしまうと、の反対の動きもありました。

しかし先ほど触れた違いだけを抛り所として、教皇パウロ六世などがこのカトリック・カリスマ運動を支持したというお墨付きもあつて、ヨハネ・パウロ二世がカリスマ運動をセクト反撃の拠点にしようとして決意いたしました。やり方としては大会堂に信者を集め、テ

レビ、ラジオなど派手なメディア戦をしかけるといって、全くペンテコステ的な戦法です。つまり、ペンテコステの戦術を用いてペンテコステを反撃する戦略なので、果たしてこういうやり方で成功するのだろうかという疑問が残ります。

六 むすび

アメリカで誕生したプロテスタント右派がラテンアメリカでどのように根付いて展開を遂げているか、主にペンテコステ派を例にお話して参りました。このようなプロテスタントが、欧米でかつて経験したように近代市民社会を内面から支えて政治経済発展を促進するものとなるかどうか、疑問に思われます。むしろ貧しい人たちが生き残るための戦略となっているのではないか。つまり周辺資本主義社会の、そのまた中心ではなく周縁部を支えている宗教といえるのではないかということです。

現在のキリスト教世界の状況を見ますと、九・一一以後、イスラム世界の動向に関心が集まっております

が、キリスト教世界でもかなり変化が起こっております。二〇〇〇年にキリスト教徒は世界でおよそ二億人を数え、総人口の三三%を占めます。そのうち、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの信者が約五八%を占めておりますので、先進国よりも発展途上国のキリスト教徒の方が多くなっているのです。二〇二五年になりますと、キリスト教人口は二六億人になり、そのうちアジア、アフリカ、ラテンアメリカの信者が六七%を占める。このテンポで増えていくと二〇五〇年に世界総人口の三四%がキリスト教徒で、その割合は変わりませんが、キリスト教徒全体の七五%、四人のうち三人が発展途上国のキリスト教徒で占められると予測されています。

かつてキリスト教は欧米の豊かな地域の宗教とみられていましたが、信者の比重が南に下がってきているということ、第三教会という呼び方が最近出てきております。これは「第三世界」のアナロジーで、冷戦後第三世界という言葉の根柢がなくなってしまうことが、歴史的には、西方教会、東方教会に次ぐ三番目

の南の教会を意味しています。

ペンテコステに代表されるプロテスタント右派がこれからどのように動いていくか。ウェーバー流に表現しますと、ペンテコスタリズムのエトスは、ネオリベラルな資本主義の精神に極めて近いと言えるのではないかと思えますけれども、政治的には冷戦後の米国主導の国際秩序を周辺から支える役割を果たしているようにみえます。今後どういう方向に行くか、眺めていきたいと思えます。

参考文献

- ① David Stoll, *Is Latin America Turning to Protestant? The Politics of Evangelical Growth*, University of California Press, 1990.
- ② André Corten & Ruth Marshall-Fratani ed., *Between Babel and Pentecostal : Transnational Pentecostalism in Africa and Latin America*, Indiana University Press, 2001.

(よつのや ひろこ／元帝京大学教授)

(本稿は二〇〇六年四月二十七日の研究会での報告内容に加筆いただいたものです)